

私のプロジェクト X

対馬 一男

巡り会えた技術士の方々に感謝を込めて

1. はじめに

昨年5月に開催された本部役員会で、本誌広報委員の佐藤厚子技術士(建設、寒地土木研究所)から本コーナーへの投稿を打診されました。今まで本誌に掲載された寄稿文は、執筆者が経験された偉大な業務に関するものが多かったため、私には到底そのようなものは書けないと丁重にお断りしましたが、執筆者の知られざる体験や想い出等を紹介してもらうことが本コーナーを始めたきっかけであり、それほど仰々しいものではないとの説得に渋々納得し、投稿することを決意しました。

いざ引き受けたものの何を書こうかと悩みながら役員会に臨んでいましたが、そこに出席されている幹事の方々に眺めながら、自分が技術士を受験したときのことやエンジョイ・サイエンス研究委員会で活動してきたこと、幹事として本部役員会に出席していることなどに思いを巡らせていると、これまでお世話になった技術士の方々の存在が脳裏に浮かんできました。

本稿では今までに巡り会えた技術士の方々とのお話を綴りたいと思います。

2. 技術士受験のきっかけ

1981年(22歳)春、大学を卒業して勤めた丸石基礎工業(後にマルイシジオテクノ)では工事部に配属され、道内外のダム現場でグラウト工事やグラウンドアンカー工事に携わっていました。道内では十勝ダムを皮切りに道営ため池でのグラウト工事、道外では福島県の日中ダムなどでアンカー工事を経験しました。7年ほどダムまわりをした後に、調査部に配置転換となり札幌の本社で地質調査を担当することになりました。

ボーリング柱状図などというものは作成したことがなかったので、ボーリングコアを観察し土質判別

をする後輩の姿を見て感心したものです。地質調査に5年携わり大体の業務がこなせるようになったころ、北海道地下資源調査所(現 道総研地質研究所)を退職した斎藤尚志技術士が常務として入社してきました。応用理学部門地質の技術士で、温泉ボーリングを自ら行うなど現場を熟知した恐るべき技術者が上司になったのです。

当時の丸石には私を含めて数名の若手土質技術者がいたので、斎藤常務はしきりに我々に技術士取得の必要性を説いていましたが、技術士など雲の上の存在と思っていた我々に受験する者などいませんでした。

ある日、会社に着くと我々の机の上に技術士願書が載っているではありませんか。一向に受験をしない我々に業を煮やした常務が打った一手でした。そのときから真面目に受験勉強を始める者も出てきましたが、私は初願書を提出したものの、試験当日は現場に敵前逃亡していました。1993年34歳の夏のことです。

高校と大学の先輩でもある斎藤常務はとても部下の面倒見の良い上司で、受験終了後にはススキノの飲食店で受験した者を労ってくれました。敵前逃亡した私は慰労会に呼ばれる訳もなかったので、翌年からは慰労会目当てで受験することにしましたが、そんなふしだらな動機で受験した私は試験会場で生き地獄を味わうことになるのです。何の準備もせずに受験した私は、問題がさっぱり解けずに1行程度の解答しか書けませんでした。受験放棄をしたかったのですが、常務が待っている店に受験報告に行かなければならないので、試験終了時間までこの上ない退屈という苦しみに耐えなければなりません。

これに懲りたので少しは受験勉強をして、このような苦しみから脱却しようと反省した私は、翌年北

海道技術士センターが主催していた技術士受験講習会に参加しました。会場には大勢の受講生が詰めかけ、技術士取得に対する人気の高さが伝わってきました。講習会の開始時間が迫り講師として現れたのは、昨年まで北海道本部長を務められていた開発土木研究所(現 寒地土木研究所)の能登繁幸技術士(建設、プラテック)でした。ぺいぺいの土質屋だった私にとって、能登本部長は全国的な指標になっている泥炭の沈下式を泥炭性軟弱地盤対策工指針で提唱した神様な存在です。そんな著名な方を初めて目の当たりにして、多少の感動を覚えながら講習会に臨みましたが、第一声が「今日は日曜なので、いつもならパチンコ店に行っているところだが、今日は講習会を優先して来た。」でした。自分勝手に想像していた能登本部長に対するイメージが私の中でかすかに崩れ始めました。

そのときは10数年後に私が北海道本部幹事に就任し、能登本部長のもとで役員会に出席することになるとは夢にも思いませんでした。技術士会の集まりでは、本部長はいつも気さくに話しかけてくれましたし、私のことを呼び捨てで呼んでくれたことがなぜか嬉しく思いました。

3. 大学柔道と技術士

1992年(33歳)夏、学生時代に室蘭工業大学の柔道部に籍を置いていた私のもとにOB会開催の案内状が届きました。母校柔道部のOB会である豊友会しょうゆうかいは、開催時期を失念しないように4年に一度オリンピックの開催年に開くことになっています。この年はバルセロナオリンピックが開催された年でしたので、開催地名を冠してバルセロナ豊友会と命名されました。

豊友会の当日は全国からOB達が母校の柔道場に集結し、現役部員と稽古や試合を行います。4年ごとの開催ですから、現役部員は卒業までに一度はOB達と顔を合わせるようになります。私も現役時代には、豊友会で先輩方に稽古をつけていただきましたが、当時のOBがとても強かったことを憶えています。

大学を卒業して以来、柔道から遠ざかっていた私

は、開催日のひと月前から子どものころに通っていた町内の町道場に顔を出して準備を始めましたが、11年間のブランクによる身体の衰えは思った以上に激しく愕然としました。中学生相手に稽古を再開しましたが、ひ弱になった手足の皮膚は畳で擦れると剥けやすく血が滲み、脛はアザだらけになり、突き指をするとひと月も痛みが引きませんでした。稽古から自宅に戻ってもすぐには食事が摂れず、水分補給ばかりを繰り返していました。

そのような状態でも何とか当日は現役学生との稽古をこなしましたが、稽古後は肩関節や股関節がじんじんと痛み出してきて、夜の懇親会は満身創痍で臨んでいました。これを機に古巣の町道場に通い始め、指導員として今日まで柔道少年の育成に関わってきました。

4年後の1996年(37歳)、アトランタ豊友会の際も母校の柔道場には、私が学生時代に稽古をつけていただいた諸先輩方が続々と集まってきました。その中には武藤征一技術士(上下水道、ムトウ建設工業)と中村良則技術士(建設、北開工営)の姿もありました。

学生時代に、このお二方には胸を借りたことがあります。卒業されて10年以上も柔道から離れていた両先輩に現役生の私がもの見事に投げられたことを思い出しました。柔道で勝てず、技術力で及ばず……まさに己の非力さを痛感させられた偉大な先輩でしたが、自分のなかに理想の先輩像が見えてきたことを記憶しています。

後年になって中村先輩が技術士試験の試験委員長をされたときに私を試験監督員として起用してくださいましたが、試合巧者であった先輩が語った試験監督員の心得を、柔道審判員の心得と重ね合わせながら拝聴しました。

柔道の試合で審判をしていると、予想外の事態が起こることがあります。そのとき審判として最も大事なことは、瞬時に状況を把握して適切なジャッジを下すことです。それは試験監督員も同じです。試験監督員には予め監督員マニュアルが配布されますが、試験会場ではマニュアルにも記載されていない状況がたびたび発生します。受験者からの質問で

あったり、ときには要望であったりですが、このとき試験監督員は他の受験者から見て有利でもなく、不利にもならないよう的確な対応をしなければなりません。



写真-1 2012年ロンドン畳友会の集合写真
(前列右から3人目が武藤先輩、左端が中村先輩、最後列右から3人目が筆者)

私は全国で試験に臨んでいる受験者と平等な条件で受験できるように対処することを常に念頭において試験監督員業務にあたっていました。

また、武藤先輩は室蘭工業大学柔道部畳友会の創設者であり初代会長も務められていましたが、現在私とその四代目会長を引き継いでいます。

4. 技術士口頭試験の思い出

福島県会津地方の喜多方市は、人口4万人弱の街ですが、ラーメンと酒造りが有名です。市内には13社の日本酒蔵元がありました。この街から車で20分ほど走ったところに、当時の農林水産省管轄のダムとしては全国一の規模を誇った堤高101m、堤頂長423mの日中ダムがあります。施工は日本を代表するスーパーゼネコン2社の共同企業体でした。

1984年(25歳)から1987年(28歳)の4年間、私は日中ダムで法面のグラウンドアンカー工事に携わっていました。この現場で1986年に共同企業体の職員であった田中裕美技術士(建設、大成建設)と出会います。ダム現場ではいろいろな工事が行われていますが、田中さんは私が施工管理にあたって

いた法面工事の企業体担当者でした。私と同じ歳だった田中さんには懇意にさせていただき、喜多方で知り合った私の家内とともにご自宅での食事に招いていただいたり、一級土木施工管理技士の実地試験を受けるために新潟までJR磐越西線に乗って行ったりしました。新潟には私の家内もついて来たので、道中は三人一緒に旅行気分を受験しに行きました。私が日中ダムを引き揚げてからも田中さんとは年賀状のやり取りが続いています。



写真-2 日中ダム全景*

1996年(37歳)に建設部門土質及び基礎の筆記試験に合格して口頭試験の準備をしていたころ、田中さんから札幌に出張するので会えないかという連絡が入りました。日中ダムを引き揚げて以来、お会いしたことがなかったので突然の電話に胸が高鳴りました。何年かぶりにお会いした夜は、とても懐かしく杯を交わすことができました。田中さんはすでに建設部門土質及び基礎の技術士となっていたので、帰京されてからも私の口頭試験に対する予想質問を二度にわたり送ってくれました。その質問の内容が技術的に極めて高度であったことは忘れません。

同年、筆記試験に合格した丸石時代からの友人である大谷高志技術士(建設、和光技研)は11月の口頭試験に向けて親切に東京のホテルを取ってくれましたので、口頭試験の前夜は田中さんも交えて恵比寿ガーデンプレイスで食事をしました。翌朝からの試験にもかかわらず、宴席が盛り上がったため多少

飲み過ぎた感がありましたが、楽しい時間を過ごすことができました。



写真-3 試験前夜の田中さん(左)との会食

試験当日、会場の控室に入ると緊張した空気が室内に張り詰めていました。空いている席に腰を降ろしてふと振り返ると、そこに本稿の執筆を私に依頼された開発土木研究所(現 寒地土木研究所)の佐藤厚子さんが座っていました。地盤工学会では佐藤さんの発表を拝聴していたので、これを機会に声をかけてみたら、少し驚いた様子でしたが明るく受け答えをしてくれました。佐藤さんとはその後、北海道本部の役員会や自然科学教育分科会、北海道土木技術会の土質基礎委員会で共に活動していくことになります。

□頭試験が終わり、帰路に就くころ若干の頭痛を感じたのは、恐らく昨夜の酒が切れてきたせいなのかもしれません。大谷さんも同じような感想を洩らしていました。無事札幌駅に着き、疲れたから帰ると言う大谷さんを無理に引き止めて駅の立飲み屋で安着祝いをしました。勢いがついた二人はそのままスキノの街へ消えていきました。

5. 北海道本部での技術士会活動

技術士として日々の業務に勤しんでいた2003年(44歳)、大谷さんから連絡がありました。技術士会のリージョナルステート研究会に自然科学教育分科会というものがある、子ども達に出前授業を行っているので一緒に活動をしないかというお誘い

でした。

以前から技術士会活動には興味があったので、まずは見学ということで定例会に参加してみました。自然科学教育分科会の座長を務めていたのは、五十嵐敏彦技術士(応用理学・建設、ジー・エイ・シー)でした。五十嵐さんは、学会や技術士会でいつも鋭い質問を浴びせるあご髭がトレードマークの憧れの技術士でした。その五十嵐さんと初めて話げできたことがとても嬉しかったことを憶えています。今から思うとこの出会いが私にとってその後の技術士会活動へのターニングポイントになったのは紛れもない事実です。

見学に行った定例会で強引に入会させられた自然科学教育分科会では、五十嵐さんが市内の小学校で行う出前授業にサポーターとして同行しましたが、翌年には講師をやってみないかと勧められ、不安を抱きながら教壇デビューをした私の拙い授業をサポートしてくれました。それからは一緒に寿都町の出前実験に出かけるなどの活動を行い、3年も経った2006年(47歳)に入会年数の浅い私を座長に推してくれました。

その後の自然科学教育分科会に対する出前授業の要請は毎年増えていきましたが、2007年から始まったサイエンス・コラボ・ティーチャー(SCOT)事業の影響が大きかったと思います。SCOT事業とは、科学技術振興機構が小学校5・6年生の理科授業に理科支援員を配置するとともに、理科特別講師として専門家を小学校に派遣するもので、まさに私たちの活動にとって追い風になるものでした。ちなみにこの事業は、2009年の行政刷新会議における事業仕分けで残念ながら2012年限りで終了となりましたが、寿都町はその後も独自でこの事業を継続されたので、2008年から今年に至るまで10年間、私たちは毎年寿都町にある二つの小学校に赴き、理科授業を続けています。

私は6年生の理科授業を担当していますが、理科カリキュラムに「大地のつくりと変化」という単元があり、地震や火山活動によって地盤が変化することを学習するものです。教科書にはボーリングマシンや土質標本の写真が載っているので、授業には岩石

のボーリングコアやアンモナイトの化石を持ち込んで児童に観察させています。

地震により発生する砂地盤の液状化現象は、児童一人ひとりにペットボトルで作らせた液状化実験装置「エッキー」を使って実験を体験させています。エッキーは500ccのペットボトルに砂とマップピンを入れただけの簡単な装置ですが、リセットが容易で何度でも繰り返して実験ができるので、子どものみならず大人も楽しく学べる優れたものです。



写真-4 サイエンスパークでのエッキー実験

エッキーは科学防災技術研究所の納口恭明博士が考案したものなので、小学生の理科授業で教材として使いたい旨をお伝えしたところ、快く了承していただきました。エッキーはその後も市内の工業高校やサイエンスパークでの実験に使わせていただきました。

2012年7月に納口さんが「元気いばらき！Summerキャンペーン」で来札し、札幌駅で公開実験をされるご連絡を受けたときには是非ともお会いしたくて赤松周平技術士（応用理学・建設、ユニオン・コンサルタント）と会場に駆けつけました。「子どもに教えるときは、彼らの心を引きつけることが大事であり、そのためには自分も恥ずかしくがらなくに演者になりきらなければならない。それにはまともな役を演じるのではなく、怪しい役ほど良いと思いますよ。」とDr. ナダレンジャーこと納口さんから貴重なアドバイスをいただきました。

2010年11月(51歳)に盛岡で開催された第13



写真-5 納口さん(中央)と記念撮影(左は赤松さん)

回北東3支部技術士交流研修会で、分科会の活動内容を発表する機会に恵まれました。この研修会は北海道・東北・北陸の技術士3支部間の交流会で、このときのテーマである「地域活性化に向けた技術者の取り組み」に関して各支部から2名ずつが発表を行いました。念願の盛岡名物わんこそばも体験し、研修会終了後には当時北海道支部長であった斉藤有司技術士（建設、ドーコン）に冷麺をご馳走していただきました。支部長お奨めの店の冷麺はスープが抜群に美味しく、また二人きりでお話できたことを懐かしく思います。



写真-6 北東3支部技術士交流研修会での発表

2011年4月(52歳)に分科会の母体であるリージョナルステート研究会の代表を北越正生技術士（建設、ドーコン）から引き継いだため、北海道支部の幹事に就任することになりました。今は選挙で幹

事を選びますが、当時は選挙制度がなかったので研究会代表になれば自動的に支部幹事になれたのでした。このころには出前授業のサポート数は多いときで年間 15 件を超えることもあり、会員数も 70 名を超えるほどになりました。会員数の規模がここまで拡大すると、もう分科会ではなく研究会に昇格とのお達しが北海道本部からあり、2012 年(53 歳)にエンジョイ・サイエンス研究会を設立する運びとなりました。

現在、日本技術士会の科学技術振興支援委員会では、廃止された SCOT 事業の代替として会員が行う理科教室及び科学技術系イベント活動に対して支援を行っています。私たちの活動も科学技術振興支援委員会に支援を申請していますが、2016 年 10 月に先ほどの田中さんから一通のメールが届きました。科学技術振興支援委員会のメンバーになられているそうで、委員会活動の際に私の名前を見つけたという内容でした。このような細やかな活動でも長く続けていると、遠く離れた地で誰かが気付いてくれて、懐かしい便りが届くことのありがたさを実感しました。

6. おわりに

本誌 141 号、142 号で能登さんと五十嵐さんが世代交代について寄稿されていましたが、私もこれを受けて昨年で北海道本部の幹事を退きました。これまで長年にわたり技術士会活動を続けてこられたこと、そして技術士会で出会えた多くの方々と触れ合えたことがとても嬉しくて、楽しかったです。

これからも北海道本部の一会員として技術士会活動に関わりながら、後進の方々に言い残したことを伝えていきたいと思っていますので、もうしばらくはお付き合いください。そして何よりも、若輩者であった私をここまで導いていただいた多くの技術士の方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

*ダム便覧 2016HP より引用

対馬 一男 (つしま かずお)

技術士(建設/総合技術監理部門)



経歴

1959 年 生まれ

1977 年 札幌西高等学校卒業

1981 年 室蘭工業大学卒業

現在 北武コンサルタント株式会社 技術本部長

講道館柔道五段